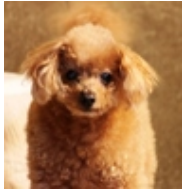


飯島賢二の 『恐縮ですが...一言コラム』

第 435 回 痴呆症の愛犬と、まっすぐに付き合う！

2011.9.4

我家の愛犬、アプリコットのトイプードルで名前は「飯島チロ」。
先日嫁いだ娘が小学校 5 年生の時に我ファミリーになったから、今年の 7 月に満 17 歳を迎えた。



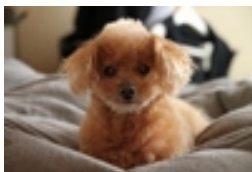
誕生日を過ぎた辺りから、少し様子がおかしくなった。
昼夜逆転、徘徊などが見られるようになり、部屋の中を徘徊した結果、狭いところへ頭を突っ込んだまま出て来れなくなったり、クルクルと同じところを回ったりする。

名前を呼ばれても反応しなくなり、
犬らしい豊かな感情表現が見られなくなった。
家庭医の獣医に相談したら、痴呆症だと言われた。



チロは無心に僕たちを愛してくれた。
一時も疑うことなく、ただ、ひたすら愛し続けてくれた。
決して多くを望まず、唯一、僕たちと遊ぶ時だけ、はちきれんばかりに尻尾を振り、その喜びを素直に伝えてくれた。

仕事から帰宅。
帰ってきて車をガレージに入れる時から、
チロの声が外まで響き渡る。
滅多に吠えない君のくせして、その泣き声は見事だった。
たとえ夜中であろうと、思いっきり尻尾を振りかざしながら、玄関まで走って飛んでくる。
今朝会ったばかりなのに、こんな光景が毎日であった。
毎日、劇的な出会いを繰り返し、それは、チロから頂いた「感動」だった。
ぎゅっと抱きしめ、優しく愛撫してやると、
安心したように、やがて静かにすり寄ってくる。
寝酒の用意をするのをじっと待ち、一緒にいっぱいやってから、寝床につく。
チロのベッドは、お父さんと一緒である。
チロのオナラはもちろん、寝言も聞き、歯軋(ぎしり)りも聞いた。
もう、本当の「家族」である。



チロは裏切りということを知らない。
騙(だま)すということも知らなかった。
溢れるほどの純愛を、見返りなしに僕たちに与えてくれた。
そのチロのために、今度は僕たちが恩返しをする番だ。
お母さんは毎日、チロに寄り添って寝ている。

一日でも、一時間でも長く、チロとの時を大切にしたいと思っているから。
チロ、たくさんの愛をありがとう！